保育者になったころ(6)
「幼児の生活はあそびである」

堀合文子

昭和十五年、学校を卒業すると同時に母校[1]の附属幼稚園に入れていただき、無我夢中で生活を始めてしまいました。これは誰でも経験することでしょう。病気で欠席の先生の組をもつことになり、その組をこわしてはいけないと、お子さんを通じて幼児教育を一生懸命探りました。講義室と附属幼稚園の保育室は隣接していましたが、学生のとき、授業の合い間にお子さんと生活していて、始業のベルの音で、あわてて教室へ戻ったことが今でも思い出されます。

その組のお子さん方が、どのような生活状態か、それぞれのお子さん方の成長の違いを理解していなければならないのに、それもわからないで夢中でお子さんたちと遊び、生活したものです。今振り返ると、若かったからできたのだと思います。それでもお子さんはついてきてくれ、今でも忘れられないお子さんでありがたいと思っております。

戦争という大きな時代に遭遇し、臨時に隣保幼稚園[2]が開設されましたが、そのお子さん方も、検定で選ばれたお子さん方とは違った素朴さがあり、それぞれの生活はいまだに頭に残っております。

学生時代に倉橋惣三先生から伺った幼児教育のお

話の、〝お子さんとよくあそぶこと〟をそのままやりましたけれど、学校を卒業したてのころには、「ああ、楽しかった」「ああ、おもしろかった」だけに過ぎなかったと思います。

二年目、組の担任となり、自分でも、ただお預かりするだけの責任を感じるだけでなく、「これでよいのかしら」「成長しているのかしら」と思うようになりました。

朝、「おはようございます」と会うその瞬間からお子さんとの生活が始まるので、無我になり、自分の体を使い、頭を使い、神経を使い、自分の全機能を使って生活をします。まず目で見て、次はどうしなければということを考えます。それは全員の一斉行動ではなく、それぞれが皆違うわけです。そのころから一組の人数は三十人か三十二、三人で、それだけのお子さん一人ひとりに体を使い、頭、神経をつかうのです。

こちらが考えて言った言葉が受け入れられたりすると、とてもうれしいです。〝それはがまんしてね〟と言うとやめたり、違うことを考えたりしてくれると〝ありがとう〟という気持ちです。

入園したばかりのお子さんには、これに〝世話〟が加わっているので、頭の中は大忙しです。

お子さんのほうは「おはようございます」と言ってから自分が好きな生活、あそびを始めていきます。何も思いあたらないのか、すぐ自分の好きなあそびに入らないお子さんもいます。それこそそれぞれで、あそぼうとしないからといって、やんやとせかしてあげる必要もありません。それにはいろいろの原因があるのでしょう。せかせることが親切のようですが、それはわかりません。その点が難しいところでしょう。

お子さんと、先生の心のかよいあいは、こんなところにも表れてきます。

このように先生は、お子さんの生活を一挙一動、見逃さないように観察している必要があるわけですね。そうかといって、観察する一方で行動もおろそかにできないのですから、努力が必要です。若いうち、保育者になったころは、このことが大切であり、また大変な努力をせねばなりません。大変なことでしたが、このころに努力したことも、後になって、内容の深い保育をするための力になったのだと思います。

一緒に生活しているという安心感・信頼感が現代よりもあったのでしょうか。私の若いころのお子さんのほうが、お友達とちゃんと遊び、生活をしておりました。また、年齢が進むと、世話ということもしだいにお子さんのほうに戻り、先生は手があくという形になってきます。

あの時代は製作というのも大いに行われていました。三歳、四歳時代は個人的に作りたいものを作ることが多く、一つのテーマをもってそれに向かっていく、ということはまだまだでした。五歳になると、「五歳だから」と、一つのテーマをもち、それに向かって皆で協力していくことが先生のほうの計画にも入ってきます。

たとえば、〝おもちゃやさん〟を作ろうとするときは、一か月くらいもかけて、やりたい人からおもちゃを作りためておいて開くのです。〝おもちゃやさん〟というテーマは、皆と相談して決めるのでなく、先生が決めていました。

この一か月の間も、お子さん方は相変らず、お友達と一緒に、自分たちでそれぞれが考えて生活をしています。その中へこの製作を入れていくのです。先生のほうは、お子さんの生活を見つめ観察しながら、「○○ちゃん○○作ってくれる」と誘導していきます。「男の方いらっしゃい、これ作りましょう」というような言葉はこの時代から言ったことは

ありません。「お友達の○○ちゃんがやっているの、わたしも」「ぼくも」と加わっていきます。

しだいに作品が増えてたところで机を並べて、そこに作品をのせて、お店のようにしていきます。すると、またそれを見て、「わたしも」「ぼくも」とほかのお子さんもやりだし、商品はどんどん増えていきます。このあたりでお店を開きましょうと思ったら、ほかの組の方をお誘いしたりして開店いたします。お店の人、お客さんと、お子さん同士で役割を決めてやってくれます。

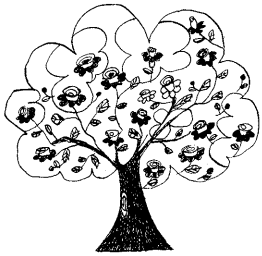
ある点は先生のほうが指示し、ある点はお子さんが主になってと、先生もお子さんの世界に入り込み、一体となってやっていく形になっていきます。先生が先に出たり、お子さんが先になったり、との生活でした。

先生が指導すべきところは、はっきりと前に出てお子さんを引っぱっていっております。製作については以上のようです。

本を読むとか、紙芝居を見るとかは組全体で一緒にしたことはありません。「読んで」と来た人に読んでいると、はじめは一人でも、「わたしも」「ぼくも」と、しだいに増える生活形態は、現代と変わらないともいえます。もちろん、〝お子さんの生活はあそび〟ということは根本的には変わりません。

お子さんは、幼稚園に来れば、自分の生活を充分に生活しているわけで、これは年齢によってそれぞれ違うのです。

お子さんは生活していますが、先生は、「今日はこれを指導しよう」と、毎日計画案として、はっきりもっております。「お子さんの毎日の生活にどう入れていこうか」「計画し



たのだからこれはやらなければ」「やってもらわなければと」と、私の頭の中にありました。すらりと入れられる日があったり、なかなか好機がつかめずに神経を使ってしまう日もあったり、このことは先生の大きな仕事です。

音楽リズムのときは遊戯室をつかう時間が各組ごとに決められていたからですが、それこそ組全体、一緒にやりました。一斉にやるので、今のお弁当のときと同じように、皆を呼び入れます。先生としては、このリズムの誘導は楽なことの一つです。

誘導という言葉をつかってきました。前述したように、お子さんの〝あそぶ生活〟から誘導していくのは、ある技術が必要で、先生が一日の計画をしたからそこへ誘導すればよいというだけでなく、お子さんは生活しているのですから、先生の計画を入れていくというのは、この時代から難しい技術でした。

お子さん同士が、あまりにもよくあそんでいるのを見ると、今日はこの計画があるのだけれど…と迷いながら、一日中お子さんの生活に流されてしまったという日もありました。降園時間前に〝おかえり〟と聞いて、〝あれ、今日は何もなかったなあ〟という顔をしてお子さん方が部屋へ戻ってきたのを今でも忘れません。

このように就職をして手探りをしながら毎日を過ごし、いろいろな経験をいたしました。

社会・世界の大きな経験にも遭遇しながら、自分の保育の経験を進めてまいりました。偉大な経験は、公私共々ですが、保育経験の偉大な経験は、今考えても、ありがたいやら、恐ろしいやらの思いでいっぱいです。

倉橋先生の授業で〝あそび〟の大切を教えていただき、遊ぶ中で幼児教育が行われていることを私の頭の根本に入れていただきました。はっきりとわ

かっていたとは言えませんが、このことが実際に行われている幼稚園に就職できたお蔭で、大変「幸」をいたしました。

初任時は戦争があり、大変な時代として過ごしてまいりましたが、その後は社会も進歩発展し、保育者としても、定年まで幸せに過ごすことができました。社会情勢を見ながらいろいろと変化はあり、変遷もいたしましたが、この保育を始めたころの幼児教育の原点――幼児の生活は〝あそび〟であるということ――が、いつの時代の保育にも変わることなく大切で、決して忘れてはいけないことだと、ひしひしと感じます。幼児教育がいろいろと変化しても原点は変わりません。

時代によって、そこに育つお子さんたちは違います。これは当然です。が、私ども保育者は、この原点をつねに忘れてはいけません。そして、時代とともに保育の原点を利用していく必要があります。原点を忘れた幼児教育は、幼児期の教育ではありません。年輩の私から若き幼児教育者へお願いと、期待をいたします。

昔のようにやってよいわけではなく、時代とともにそこに育っている幼児も違うので、現場では変遷の必要があります。これがいつの世にも保育者の大切な考えることだと思います。

（十文字学園女子大学客員教授・
新現代幼児教育研究会）

註

1　東京女子高等師範学校保育実習科

2　太平洋戦争が激化し、昭和二〇年三月に幼稚園は閉鎖されたが、近隣の幼児を預かり、保育を続けていた。

☆このシリーズは今回で終わります。